

「大同生命地域研究賞」30周年記念シンポジウム

混迷の時代を読み解く

- 地域研究を未来にどう活かすかー

講演録

開催日:2015年11月23日(月·祝)13:30~16:00

場 所:大阪大学中之島センター 10階「佐治敬三メモリアルホール」

主 催:公益財団法人 大同生命国際文化基金

共 催:大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立民族学博物館

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所

目 次

開催趣旨

プログラ	5L1
講師・フ	ペネリスト・コーディネーターのプロフィール2
開会あい	はつ
第一部	基調講演
第二部	パネルディスカッション

開催趣旨

急速なグローバル化が進行する一方で、文化・歴史・宗教などの多様性に起因する対立が世界各地で深刻さを増しています。

地域紛争、民族対立、飢餓、環境破壊などもその表れと言えるでしょう。

これらの諸問題の解明には、各地域の政治、経済、文化、社会などを広く研究する「地域研究」の存在が欠かせないものになっています。

「大同生命地域研究賞」は、地域研究または国際親善・貢献の分野で優れた功績を挙げた方を毎年表彰し、2015年で第30回を迎えました。

これを記念して、地域研究はその解明にどう立ち向かおうとしているのか、 グローバル化時代に求められる地域研究のあり方を探ることを目的に開催しました。

プログラム

13:00 開場

13:30~13:40 開会あいさつ

公益財団法人 大同生命国際文化基金 理事長 喜田哲弘

13:40~14:20 第一部 基調講演

「鉄の胃袋」をもった男が語るフィールドワーク

講師 石毛 直道 氏 (国立民族学博物館 名誉教授)

食文化研究の第一人者が、世界100ヵ国以上を歩いてきた経験をもとに、フィールドワークから見えてくる習俗、暮らし、環境等の多様性とフィールドワークの面白さを語ります。

14:20~14:30 休憩

14:30~16:00 | 第二部 パネルディスカッション

地域研究 最前線からのメッセージ

-持続可能な安定と平和、その可能性を考える-

パ ネ リ ス ト 小林 知氏(京都大学東南アジア研究所 准教授)

酒井 啓子 氏 (千葉大学 法政経学部長 教授)

佐川 徹氏(慶應義塾大学文学部助教)

コーディネーター 島田 周平 氏 (東京外国語大学大学院総合国際学研究院特任教授) 2 1 世紀に入っても世界では多くの紛争が起こっています。領土問題、民族 問題、宗教対立、貧富の格差、グローバル化の中で進む資源獲得競争など紛 争の原因はさまざまで、しかも複雑に絡んでいます。世界各地の紛争に関わっ ている地域研究者がその紛争をどのように理解し、解決に向けた処方箋を提 示できるか討論します。

16:00 閉会

講師・パネリスト・コーディネーターのプロフィール

<第一部 基調講演>

●講師



石毛 直道 氏 (国立民族学博物館 名誉教授)

京都大学大学院文学研究科(考古学)博士課程中退(1965年)

1965年京都大学人文科学研究所助手、1973年甲南大学文学部助教授、1986年国立民 族学博物館教授、1997年国立民族学博物館館長(~2003年)、2003年国立民族学博物 館退官、同名誉教授。現在に至る

主な著書 『日本の食文化史-旧石器時代から現代まで』(岩波書店, 2015)

『石毛直道自選著作集』(全12巻)(ドメス出版.2013)

L'ART CULINAISE AU JAPON (Lucie editions, France, 2012)

『飲食文化論文集』(清水弘文堂書房, 2009)

『石毛直道 食の文化を語る』(ドメス出版, 2009)

『ニッポンの食卓 - 東飲西食 -』(平凡社, 2006)

『食卓文明論 - チャブ台はどこへ消えた? -』(中公叢書 . 2005)

『食べるお仕事』(新潮社,2003) 以上のほか著書論文多数

<第二部 パネルディスカッション>

●パネリスト (五十音順)



小林 知 氏 (京都大学 東南アジア研究所 准教授)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科単位取得退学(2005年) 2005年日本学術振興会特別研究員(PD)、2007年京都大学東南アジア研究所助教、 2013年京都大学東南アジア研究所准教授。現在に至る

主な著書 『カンボジア村落世界の再生』(京都大学学術出版会, 2011)

主な論文 「紛争とその後の復興が教えること -1970 ~ 93 年カンボジア紛争」(牧紀夫・山本博 之〈編著〉、『国際協力と防災 つくる・よりそう・きたえる』, 92-124, 京都大学学術 出版会, 2015)

> 「森にセイマーを見いだす-浄域を通してみるカンボジア仏教再生の動態」(藤本透子編, 『現代アジアの宗教-社会主義を経た地域を読む-』, 419-469, 春秋社, 2015)

> 「カンボジア農村における仏教施設の種類と形成過程」(『東南アジア研究』51巻1号, 34 - 69.2013

> 「カンボジア農村における死者儀礼」(立川武蔵編」。『アジアの仏教と神々』, 129 ― 147. 法蔵館, 2012)

> 「カンボジアとラオスの仏教」(吉田香世子と共著)(林行夫編,『新アジア仏教史04 スリランカ・東南アジア 静と動の仏教』, 265-322, 佼成出版会, 2011) 以上のほ か著書論文多数



酒井 啓子 氏 (千葉大学 法政経学部長 教授)

東京大学教養学部教養学科国際関係論(1982年)

1982 年アジア経済研究所、1986 年在イラク日本大使館専門調査員、1995 年アジア経済 研究所カイロ海外調査員(~ 1997 年)、2005 年東京外国語大学大学院教授、2012 年千 葉大学法政経学部教授、2015年千葉大学法政経学部長。現在に至る

主な著書 『中東から世界が見える』(岩波ジュニア新書, 2014)

『<中東>の考え方』(講談社新書, 2010)

『イラクで私は泣いて笑う――NGOとして、ひとりの人間として』(めこん,2009)

『イラクは食べる』(岩波新書, 2008)

『イラク 戦争と占領』(岩波新書, 2004)

『フセイン・イラク政権の支配構造』(岩波書店,2003)

『イラクとアメリカ』(岩波新書,2002) 以上のほか著書論文多数



佐川 徹 氏 (慶應義塾大学 文学部 助教)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了(2009年) 2010 年日本学術振興会特別研究員(PD)、2011 年京都大学大学院アジア・アフリカ地

域研究研究科助教、2014年慶應義塾大学文学部助教。現在に至る

主な著書 『暴力と歓待の民族誌-東アフリカ牧畜社会の戦争と平和』(昭和堂 , 2011)

「家畜キャンプにたどりつくまで―東アフリカ牧畜民の移動と紛争」(佐藤靖明・村尾るみ こ〈編〉、『衣食住からの発見』、54-66、古今書院、2014)

「エチオピア牧畜民に大規模開発はなにをもたらすのか」(内藤直樹・山北輝裕〈編〉,

『社会的包摂 / 排除の人類学』, 41-56, 昭和堂, 2014)

主な論文 「紛争多発地域における草の根の平和実践と介入者の役割―東アフリカ牧畜社会を事例に」 (『平和研究』44.1-19.2015)

> 「現代アフリカにおける土地をめぐる紛争と伝統的権威―特集にあたって(『アジア・アフ リカ地域研究』14/2,169-181,2015) 以上のほか著書論文多数

●コーディネーター



島田 周平 氏 (東京外国語大学大学院 総合国際学研究院 特任教授)

東北大学理学部理学士(1971年)

1971年アジア経済研究所調査研究員、1989年立教大学文学部教授、1992年東北大学理 学部教授、1998 年京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授、2008 年京都大 学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科長(~2010年)、2012年東京外国語大学大学 院 総合国際学研究院 特任教授。現在に至る

主な著書 『現代アフリカ農村 - 変化を読む地域研究の試み -』(古今書院, 2007)

『アフリカ 可能性を生きる農民』(京都大学学術出版会, 2007)

『地域間対立の地域構造ーナイジェリアの地域問題―』(大明堂, 1992)

主な論文 「ボコハラムの過激化の軌跡」(『アフリカレポート』52,51-56,2014)

「2000年代ナイジェリアの地域紛争過激化について考える」(『アジ研ワールド・トレンド』 205号, 14-17, 2012)

「アフリカの農家世帯の脆弱性をどう捉えるか」(『歴史のなかの熱帯生存圏ー温帯パラダ イムを超えて一』/『講座 生存基盤論 1』, 415-437, 2012) 以上のほか著書論文多数

<開会あいさつ>

喜田 哲弘(公益財団法人 大同生命国際文化基金 理事長)

皆さん、こんにちは。

大同生命国際文化基金理事長の喜田でございます。本日は大勢の皆さまに「大同生命地域研 究賞」30周年記念シンポジウムにご参加を賜りまして、お礼を申しあげます。

主催者を代表いたしまして、ひとことご挨拶申しあげます。私どもの財団は、わが国と諸外国との文化交流を通じて、国際社会の相互理解に貢献することを願い、今から30年前の昭和60年(1985年)に設立されました。

私ども財団の主要な活動のひとつである「大同生命地域研究賞」は、東南アジア、アフリカ、中東をはじめとする、世界各地の地域研究において活躍される研究者の皆さまや、国際貢献に尽力された方々を表彰するものでございます。運営にあたりましては梅棹忠夫先生をはじめ、多くの有識者の方々からのご指導を賜りながら、これまでのべ117名にのぼる受賞者の方々の功績を広く社会にご紹介できましたことは、大きな喜びとするところでございます。

また、アジア諸国との相互理解を深めることを目的に、アジアの優れた小説や詩を日本語に翻訳、出版し、アジア各国の文化を紹介する事業も行っております。作品の一部は最近では電子書籍として当財団のホームページでも公開いたしております。どうぞ一度ご覧いただければと思います。



このように、設立から30年もの長きにわたりまして事業を継続できましたことは、ひとえに皆さま方のご支援ご協力の賜物でございます。心から感謝とお礼を申しあげます。

さて、急速なグローバル化が進行する現在、文化・歴史・宗教などの多様性に起因いたします、

さまざまな問題が世界各地で発生しております。先日、フランス・パリで起こりました同時多発テロ事件は、そのひとつの表れかと存じます。被害に遭われました多くの方々に心から謹んで哀悼の意を表させていただきたいと思います。そして同時に、世界平和への思いをあらためて強くした次第でございます。

これらの諸問題の解明におきまして、各地域の文化・社会の相互理解を深めることを目的に した地域研究の存在がますます重要になってまいります。

そこで本日のテーマを「混迷の時代を読み解く -地域研究を未来にどう活かすか-」とさせていただきました。

一部を石毛先生の基調講演、二部をパネルディスカッションという構成にさせていただいております。このシンポジウムを開催するにあたりまして、大同生命地域研究賞選考委員会の秋道智彌委員長をはじめ、委員の先生方のご協力、ならびに国立民族学博物館、総合地球環境学研究所には共催をいただいております。この場をお借りいたしまして、関係者の皆さまに心よりお礼申しあげます。

少しだけ設立母体の大同生命について触れさせていただきたいと思います。大同生命は明治 35年(1902年)に設立されました。現在 NHK で放送されております朝の連続テレビ小説「あさが来た」のヒロインに「白岡あさ」さんが登場しておられますが、彼女の本名は「広岡浅子」であり、大同生命を創業した人物のひとりでございます。

女性に教育は不要とされた時代に、独学で経営を学んで、炭鉱の開発、生命保険会社の経営、 そして日本で初めての女子大学(日本女子大学)の設立など、生涯を走り続けた彼女がもっと も大切にしていたのは、「自分のためにではなく社会のために」というスローガンでございます。 浅子の想いは「相互扶助」の精神に則りまして、現在も大同生命の想いとして受け継がれ、当 財団の活動はもちろんのこと、さまざまな社会貢献活動にもとり組んでおります。

最後になりますが、本日のシンポジウムが皆さまにとりまして有意義なものとなりますこと を祈念し、私からのご挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願い申しあげます。 ありがとうございました。

<第一部 基調講演>

「鉄の胃袋」をもった男が語るフィールドワーク

講師 石毛 直道 氏(国立民族学博物館 名誉教授)

皆さん、こんにちは。

さきほど喜田哲弘理事長から、公益財団法人大同生命国際文化基金についてご紹介がありま したが、私もこの財団に関係する者として事業内容について簡単にご説明申しあげます。

この財団では「大同生命地域研究賞の贈呈」のほかに、翻訳出版事業と教育支援事業があります。翻訳出版事業は2種類あり、ひとつがアジア諸国の現代文芸作品を日本語に翻訳出版し、全国の大学や公立図書館に寄贈している「アジアの現代文芸」シリーズです。

もうひとつが日本の文芸作品や文献を、アジア各国語(ミャンマー語やラオス語、カンボジ ア語、タイ語など)へ翻訳出版し、それぞれの国の図書館や学校へ寄贈している「ジャパニーズ・ ミラーズ」シリーズです。



教育支援事業としては、勉学環境に恵まれない東南アジアの子どもたちのために学校を建設 したり、文房具や図書を寄贈したりといった事業も行ってきました。

さて、今日はフィールドワークについてお話をするわけですが、フィールドワークとは日本 語に訳すと「現地調査」、つまり研究者自身が現地へ出かけて調べる調査方法です。

ただ現地調査といいましても、調査をする対象によって方法はずいぶん違います。たとえば 私が以前ご一緒した地質学専門の方や植物の専門の方の調査方法は、私とはまったく違ってお りました。植物の専門家が行っていた現地調査は、東南アジアのひと気の少ない地帯にある森林や草原に生えている植物を記録して、植物相互間の関係を調べておられました。さらにはその植物をたくさん集めて標本にして持って帰り、研究資料に使うというやり方ですね。それに対して、人文科学、つまり文化や社会の研究のフィールドワークは現地の人々の生活や文化に根ざしたことを、調査者自身が実際に体験しながら記録したり、その体験をもとにして物事を考えたりするものです。

さて、今日のシンポジウムは、「地域研究」がテーマです。

少し前までは日本が世界を考えるとき「国際化」という言葉がよく使われ、「世界の中での日本、日本が世界と肩を並べていくにはどうしたらいいのか」ということがよく問われていました。そういう場合、日本では政治や経済をともにする最大集団をまとめて「国家」という単位で表しますが、世界の中には多民族国家、つまりひとつの国の中に言葉や文化が異なる集団が入っているという国がたくさんあります。日本の場合はおおまかにいえば一国家一民族なので、国家単位で論じていたようなところがありますが、国家単位でものを考えるというのは世界的には難しく、文化を考えるときには通用しないことがあります。

そして国際化、国際化といわれた時代が過ぎて、現在は地球時代、グローバル化といわれています。交通手段や通信手段の発達によって、国境を越えて人やモノや情報がどんどん行き交い、企業も世界中に進出するようになりました。

その一方で、国家単位どころではなく「人類」というひとつの生物の種を守ることを中心に 将来を考えなければならない時代になっています。たとえば地球温暖化に象徴されるような人 類が地球に与える環境の変化がどんどん積もっていくと、結局は人間がもう生きられない時代 になるかもしれません。このように人類全体として考えなくては危ない時代がきているのです。

しかしながら国家というのはまだまだいくらでも成長したいのですね。そして成長するためには国民がいろんなものを作り出さなければいけませんから、一国家にとって人間は一番の財産なのです。そこで日本も人口減少・高齢化社会の問題を打開するために少子化対策の大臣を置き、もっと子どもを産んでもらって人的資源を豊かにしようという政策があります。これは日本だけではなく、世界でも国家単位ではだいたい同じことをしています。国民を増やせば豊かな人的資源がいろんなものを生産してモノにあふれた経済的豊かさを享受できる。そういったモノの豊かさを大きくしていこうというのが、近代国家が今までずっととり続けてきた道です。

しかし、そうやって人口が多くなっていけば、地球環境の破壊はどんどん進んでしまいます。 人類という種を長生きさせるには、むしろ地球全体の人口増をどうやって食い止めるかを考え る必要がある、ということは小学生でもわかる簡単なことです。なのに、国家は決してそれを やらず「モノの豊かさ」だけを今なおずっと追い求め続けている。もっと「心の豊かさ」を追 い求めることで人々が幸せになれば、人類は人口の爆発的な増加を食い止めることができます。 それが人類という種をもう少し長生きさせることができる道だと思うのですが、国家はそのこ とを誰にも言わないのです。

現代は、生活環境や歴史などの地域文化を理解したうえで世界を考える時代になりました。このあとのパネルディスカッションでも出てくると思いますが、たとえば今、民族紛争が世界でかなり大きな問題になっています。これは文化を同じくする民族が、国家や国境という区切りで分断されたことにより、葛藤が生まれたからではないかとも考えられます。民族の分布と国家の分布、国境はまた別ですから、そうなるとそれぞれの民族の地域研究をするということがたいへん重要になってきます。

人文科学の分野で地域について知るためには、研究者自身が現地の生活を体験して考えるフィールドワークがたいへん重要です。そこで今日は、ご参考までに私が今までやってきたフィールドワークについて少しかいつまんでお話しさせていただこうと思います。

自分で自分のことを語るのはどうも照れくさいので、こういった場所で話すのは初めてですが、今にして思えば、私は子どものころからフィールドワークが好きでした。私が中学時代を過ごした千葉県の北部には縄文時代の貝塚がたくさんあって、よく土器の表面採集をしていました。耕した畑の土から貝殻が出ているのを見つけると、「ここは貝塚かもしれない」と、そこを掘って土器を表面採集しては、記録や拓本をとりました。

近所には考古学を専門にしていた大学生がいたので、拾った土器を見てもらったり、考古学のいろんな専門書を借りたりして調べました。そうしているうちに、関東地方の縄文土器の編年というのが自分でもわかるようになって、畑で拾ってきた土器を見れば「これは勝坂式土器だ」とか「加曽利B式土器だ」とかまでわかるようになったのです。

そんなことをしていたあるとき、畑の表面から「これは弥生土器ではないか」と思えるものを発見しました。千葉県の北部というのは弥生文化の遺跡はそれまでひとつも発見されていなかったのですが、それを拾って大学生に見せると「たしかにこれは弥生土器だ」というのです。それから大学の発掘隊がやってきて、そこから住居跡が発見されたということもありました。

こんな子ども時代でしたから、いつか海外にも行ってみたいと思っていました。当時はまだ

海外渡航の自由がないし、外貨もそう簡単には手に入らない時代ですから、なおさら海外への憧れがありましたね。大学を受けるときも、当時国立大学で考古学の講座や研究科があったのは京都大学だけだったので、私も周囲もそこを受けるつもりでいましたが、一時は「商船大学に行って外国航路の船乗りになれば海外のいろんなところに行けるじゃないか」と迷ったこともありました。

無事に入学できた京都大学では、教養学部のころは授業にはほとんど出ずに、ずっと考古学の教室に入り浸り、あちこちでやっている発掘に出かけていきました。学生ですから、発掘作業をしてもアルバイト代は出ません。でもひとつの遺跡を掘るのに何日もかかりますから合宿になり、食事をずっと出してもらえるのです。貧乏学生だった私には、それが大きな魅力で発掘ばかりしていました。そのときの考古学の発掘で覚えた地図の作り方や絵の描き方などは、その後、文化人類学で各地をフィールドワークする時にもたいへん役に立ちました。



ずっと持ち続けていた「海外に行きたい」という憧れを叶えるために、「京都大学探検部」という学生のクラブに入りました。当時は、海外に行くためには「渡航審議会」の審査を通らないとパスポートはもらえませんし、「外貨審議会」の審査を通らないと日本円を外貨に交換することもできません。もしできたとしてもひとり500ドルまで、という時代です。そこで何とか海外に行きたいという学生たちが集まってクラブを作り、大学の先生や顧問の先生を担ぎあげて、その先生が海外で調査をするときに自分たちも調査隊のメンバーや補助員に入れてもらって海外へ行くということをしていました。私も大学生のころはトンガ王国に、大学院ではニューギニア高地のまだ外国人が入ったことのない民族の中へ入って調査をしました。

トンガではそれまで考古学的な調査はされていなかったので、貝塚を掘ろうと思っていました。ところがトンガの島を歩いてみると島中が貝塚だらけなのです。これらは現代の貝塚で、 浅瀬でとれた貝を家族みんなで食べたあとに、家の裏に捨てられていく貝殻でできていました。 島というのは、だいたい珊瑚礁に覆われているので、男性は船に乗って珊瑚礁の外にいる大き な魚をとりに行き、女性は内側の浅瀬で貝を拾うのが仕事です。そういう生活を毎日している ので、家の周りはみんな貝塚になるのですね。そんな現代の貝塚は、とても興味深いものでした。

ニューギニアでは、ある村落に滞在しました。これは本多勝一氏の『ニューギニア高地人』という本にも書かれていますが、そこは私どもが訪れる10年前まで石器を使っていた村で、最初はその石器の作り方やどうやって手に入れるのかなどを調べていたのです。しかし、いろいろ聞いているうちに、石器そのものより石器をめぐるいろんな民族同士の交易の旅など人間くさい話のほうに興味を持つようになっていきました。

また、海外での考古学の発掘は、大きな遺跡が見つかれば、毎年そこへ調査隊を出して作業するので、ひとつの場所での発掘に10年ぐらいかかります。するとあちこち行くというわけにもいきません。そんなことで、私は大学院のときに考古学から文化人類学に転向することにしました。

そうはいっても文化人類学での現地調査、フィールドワークはそこに住む人々の生活、あるいは社会や組織などさまざまなことを調べるわけですから、できるだけ長い間、人々の間で暮らすほうがいいのです。私の場合は8ヵ月ぐらいでしたが、望ましいのは1ヵ所に1年間は滞在して、季節の移り変わりにおいての農業の変化や、年中行事のすべてを観察することです。そして現地の人間のことを調べるわけですから、当然現地の人とコミュニケーションをとることが必要で、そのためには現地の言葉を話せなければいけません。

私の場合は、現地語でしゃべれるのはインドネシア語とスワヒリ語ぐらいですが、もっとやっておけば良かったと思っています。私は自分の方針で前もって現地の言葉を勉強するのは2ヵ月以上長期滞在する場合だけ、と決めていました。すると、たとえばお隣の韓国などは何ヵ月も滞在することなく調べたいことだけ調べたらすぐ日本に戻れるので、本格的には韓国語を勉強しませんでした。また私どもの世代の韓国の方、研究者には日本語を話せる方が多くいらっしゃったので、覚える必要もなかったのですが、今になってもう少し勉強しておけば良かったなと悔やんでおります。

さて私が行った調査のひとつ、東アフリカのタンザニアでのフィールドワークについて簡単にお話しします。タンザニア内陸部の奥地にあるサバンナの中に、京都大学のアフリカ研究におけるひとつの拠点となった、マンゴーラ村があります。この村は、梅棹忠夫さんも調査をされていたところで、日本でいえば神奈川県と同じぐらいの大きさがあります。大きいとはいえ乾燥したサバンナの中にほんの少し人間の集落があるだけで、一番近くの小さなお店までは、ジープのような車で道もないようなところをひたすら走って3時間ほどかかります。もちろん



電気もガスも水道もありません。そんな場所で、私は昔から京都大学の人がお世話になっている一軒家のひと部屋に家賃を払って荷物を置き、調査を開始しました。

その村には4つの民族が住んでいました。まず狩猟採集民であるハツァピ族。私が訪れたのは今から50年ほど前ですが、鉄砲なんかありません。足で歩いて行っては獲物の群れを追い、弓矢で倒してその肉を食べたり、野生の果物の実をとって食べたりしながら、しょっちゅう移動している民族です。次に、牛を飼う牧畜民であるダトーガ族。牛を放牧して歩き、その乳と肉を主な食料にしています。それから農業と牧畜をしているイラク族と、農業をやっているスワヒリ族という定住民族がいます。

この4つの民族の調査を、限られた時間の中でなるべく充実させるため、私は自分で名づけたのですが「居候方式」という調査をしました。つまり荷物は最初に借りた農耕民の一軒家に置いたまま4つの民族と付き合い、それぞれの民族の中で親しくなった人に頼んで、その家に居候させてもらうのです。幸いなことにそこの民族にはたいていスワヒリ語を話せる人がいるので、直接コミュニケーションをとることができました。居候ですから、お金を払わずタダで住ませてもらうので、生活に自分の自由はなく、寝る時間も起きる時間も食べるものも、すべて相手の生活に合わせます。畑仕事にもついて行って、手伝いをしました。

こうして土地の人と生活を全部一緒にすると、短い期間でもかなりのことがわかってきて、4つの民族の生活文化を比較した論文も書くことができました。これについてはおもしろい話がいろいろとあります。今回は時間が限られているのでやめておきますが、たとえば農耕民の暮らしだとそもそも持ち物は少ない民族なので、彼らの洗濯物をずっと見てそれを記録にとどめておいたら、下着から普段着ているものまで、服のことはすべてわかります。食生活につい

ても毎日一緒に同じものを食べるので、食べたものや台所仕事をノートに付けておいたことが、 後の食文化研究でもたいへん役に立ちました。

じつは、歳をとったらもう一度マンゴーラ村に行って、狩猟採集民や牧畜民の生活や文化がいかに変化したかを調べようと思っていました。ところがあるときに大怪我をしてしまい、その後遺症で長距離を歩くフィールドワークができなくなってしまったのです。こうして再調査は断念せざるを得ませんでした。

このように、私も初めは文化人類的な、一般的な調査をしていたのですが、あるときから食べ物についての調査をよくやるようになりました。実は1980年代までは、食文化を全般的にとらえるという研究はアメリカやヨーロッパでもほとんどなかったのです。人がやらない仕事だと聞くと「だったら自分がやろう」と思い込む性質の私は、それからは食文化を中心とした研究をするようになりました。未開拓の分野だったら、なるべく広くいろんなところの食文化を知って、たくさんの情報をもとに比較研究しようと思ったのです。

世界のいろいろな場所を巡っての食文化フィールドワークは、1ヵ所に長く滞在するときとは違い、自分が現地語をすべて習って直接コミュニケーションすることが困難です。東南アジアで魚の発酵食品を調べたことがあるのですが、私は魚のことがあまりよくわからなかったので、漁業生態学を研究する専門家だった私の同僚、ケネス・ラドルさんというイギリス人と一緒に調査をしました。東南アジアを200ヵ所以上回るというと、いろんな国の言葉が必要です。そこで自分たちが知っている東南アジアの研究者に連絡をとったり、大学院の学生で英語がしゃべれる人にアルバイトで来てもらったりして、一緒に回って調査しました。

新しい場所に着いたらどうするかというと、まずは市場へ行きます。市場にはその地方のいるんな食べ物が集まっていますので、だいたいの食生活のアウトラインを見ることができます。それから市場の人に「この発酵食品はどこで作っているのか」「誰が作っているのか」ということを教わって、その場所に出かけて行きました。市場の周りには小さな露店がたくさんあるので、そこで食べてみることもありますが、食文化研究で一番大切なのは、現地の普通の民衆がふだん何を食べているかを知ることです。ですから私はよく現地の家庭を訪れて、そこの人と同じものを食べました。何しろ食べ物というのは、自分で口にして体験しなかったらどうもわかった気になりません、写真を撮ったり本を読んで得た食物の知識というのは、絵に描いた餅に過ぎないのです。

食文化を研究すると決めたとき、私は食べ物を仕事にしたら食いっぱぐれがないし、何か美味しいものを食べられるんじゃないかと期待していました。しかし普通の民衆がいつも美味し

いものを食べているなんてことはなく、どちらかといえばちょっとしんどい研究だったなということがだんだんとわかってきました。

たとえば麺の研究をしたときは、イタリアのスパゲッティのような長いパスタと中国との関係を調べるためにイタリアに出かけました。このときイタリアに滞在できる時間は短かったので、なるべくいろんな麺を知るために1食で4種類のパスタを食べました。私なりの結論としては、中国の麺がアラブ世界を通ってイタリアに行ったということになったのですが、帰国して病院へ行ったら糖尿病だと診断されました。それから私は20年間糖尿病の薬を飲むようになったのですが、「これは職業病だから労災保険を」といっても通らないでしょうから、申請できずに今にいたっております。

ちょうど時間となりました。これで基調講演に代えさせていただきます。皆さん、ご清聴ありがとうございました。

<第二部 パネルディスカッション>

地域研究 最前線からのメッセージ 一持続可能な安定と平和、その可能性を考える一

パネリスト

小林 知氏(京都大学 東南アジア研究所 准教授)

酒井 啓子 氏 (千葉大学 法政経学部長 教授)

佐川 徹氏(慶應義塾大学文学部助教)

コーディネーター

島田 周平 氏 (東京外国語大学大学院 総合国際学研究院 特任教授)

東京外国語大学の島田と申します。大同生命地域研究賞の30周年記念でシンポジウムを開催するという話になったときに、私たち地域研究賞の選考委員でどういうテーマでとり組むか、ということを話し合いました。

私はアフリカを研究していますが、2000年以降、皆さんも感じておられますとおり、アフリカ各地で地域紛争がたいへん過激になってきました。私が研究していますナイジェリアのボコハラムのように、過激なうえに外国人を誘拐するようになってくると、地域で起きたことなのに「国際テロ」として日本でも新聞記事に載ります。このような問題は、もちろん古くからあったものですが、アフリカに関していえば、とくにこのように国際化してきたのは200年以降です。もちろん皆さんの関心の大半はイスラーム、かつ中東の地域紛争にあると思うのですが、アフリカでも同じようなことが起きるようになってきました。

このことは、地域研究に長く携わっている研究者が、今回の記念シンポジウムで取りあげるのによいテーマではないかと思い、この「混迷の時代を読み解く」というタイトルにしました。去る11月13日にパリで同時多発テロが起こり、期せずしてこのテーマが一層脚光をあびるようになりました。もちろん、我々がこのような事件が起きることを想定していたわけではまったくなく、これまで準備を進めてきた次第です。

今日は、長きにわたり地域研究をされている新進気鋭の、また高名な3名の研究者にお越し いただき、各地で起きている混迷をどのように読み解いているかということを紹介していただ きます。ひとり当たり15分で発表していただいたあと、私から2、3の質問をさせていただき、 なおかつ報告者の間で、ほかの人の発表に関して聞きたいことを少し議論していただければと 思っております。

それでは、進めてまいります。最初に小林さんから発表をお願いします。

○小林

ご紹介ありがとうございます。京都大学東南アジア研究所の小林知と申します。島田先生から地域紛争について地域研究者として考えることを話すように、というお題をいただきました。私たちパネリストを見ていただくとわかるように、それぞれ東南アジア、中東、アフリカという分野を研究しています。私は東南アジアについて話します。

東南アジア全体を考えますと、たとえば領土紛争のひとつが、今まさに中国とフィリピン、ベトナムなどの間で起こっています。ここには ASEAN(東南アジア諸国連合)の安全保障の話も絡んできます。また、宗教紛争というと、先だって終わったミャンマーの総選挙のなかには、仏教徒とイスラーム教徒の間の紛争という問題があったという見方もでき



ます。このように、東南アジアでは紛争が多様な形でみられますが、私はカンボジアのことを 専門でやっておりますので、カンボジアの紛争についてお話しします。

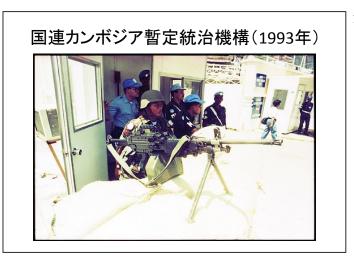
現在カンボジアで起こっている紛争は、たとえば森林破壊や、都市と農村の格差に関する国内の問題もあるのですが、今日は、おそらく皆さんが一番関心をもたれていて、私自身も強く関心を持っているカンボジアの歴史についてのお話をしたいと思います。具体的には1970年代から1990年代初め、冷戦といわれていた時代のカンボジアで起こった革命と、その後を取り巻く紛争状態に関する話です。過去のことですので、ある意味、もう終わった紛争というイメージを持たれている方も多いと思います。しかし私の今日の発表のポイントは、根源的なところでは紛争の要素は今も続いている、今もまだたしかに混迷の時代の中にいるんだ、ということをお伝えできればと思っています。

皆さんご存知だとは思いますが、カンボジアは東南アジアの内陸部、インドシナ半島の南部 にありまして、熱帯モンスーン気候の国です。ちょうど今は雨季が終わって、乾季に切り替わ る時期を迎えています。雨季は非常に多くの雨が降り、それが増水を招いて、たくさんの魚を 育てます。カンボジアではなんといっても、魚が主菜になります。資料の写真のとおり、食事 には魚がいつも出てきます。【資料1】 写真はカンボジアの食文化の紹介のひとつで、プラホックという魚の発酵調味料です。日本の味噌みたいなもので、スープの味付けなどに使います。これらを見ていただければわかるように、非常に自然が豊かな国で、元々魚も湧いて出るように、たくさんいました。しかし今日お話しするポル・ポト時代には、そこに魚がいても許可がなければ食べられなかった、といいます。そういう、ちょっと常識では考えられない状況があった時代の話をします。



資料 1

もうひとつ、カンボジアについて日本の方の記憶に残っているのは、1993年に、日本で 戦後初めて自衛隊を PKO 派遣したことでしょう。そのとき、日本人の明石康さんが国連の代 表を務めた、UNTAC(国連カンボジア暫定統治機構)の活動がありました。【資料2】この機 構のもとに1993年に行われた選挙で、カンボジアの紛争の歴史に一応決着がついたという 形になっています。



資料2

カンボジアの紛争については、レジュメにごく簡単な年表をつけておきました。【資料3】 カンボジアはフランスの植民地支配を受けたあと、1953年に独立し、シハヌークとい う2012年に亡くなられた王様を中心にした新興国としての発展を歩みました。ところが 1960年代に入ってから隣国でベトナム戦争が始まり、その影響を受けて1970年代には クーデターが発生します。【資料4】そのあとは、クーデターを実行した、アメリカが背後に いたといわれるグループが建てた共和国政府に対して、シハヌークを中心とした王党派と、の ちに「クメール・ルージュ」と呼ばれる共産主義者のグループが合流した勢力が挑む形で内戦 が始まり、いろんな経緯がありまして、1975年に共産主義勢力側が勝利しました。

紛争の過程

・1953~70年 フランスからの独立/シハヌークの

権威主義体制へ

·1970~75年 内戦 (親米 vs. 共産主義勢力+王党派)

・1975~79年 クメール・ルージュ時代

(「伝統の破壊による新社会建設」)

・1979~89年 内戦&国際的孤立

・1993年 UNTAC (国連カンボジア暫定統治

機構)による選挙

・1998年 ポル・ポト派の消滅/フン・センの

権威主義体制の強化

資料 4

資料3

カンボジア紛争(1970~1993年)



そして、そのあとに起こった革命により、都市を否定して、国民全員が農村に居住するようになりました。貨幣と市場をなくし、すべての経済は国家が管理する。家族も廃止して、両親と子どもは一緒に食事をするのではなく、子どもは子どものグループで、大人はそれぞれ成人男性と成人女性のグループで労働して貢献せよ、となりました。ポル・ポト時代のカンボジアの状況については、皆さんの中で記憶がある方も多いと思います。食物はあっても、許可がなくては食べられませんでした。魚はいましたが、空腹だからといってつかまえると規律違反になり、連れて行かれて殺されるといったことが多くあったといわれています。

そのあと1979年にベトナムの侵攻によってポル・ポト政権が倒れ、それから10年以上、

カンボジアは国際社会から孤立してしまいました。当時は冷戦体制が続いていましたので、カンボジアについての情報は非常に限られた範囲でしか伝わってこない時代が長く続きました。私自身は1994年に初めてカンボジアに行きまして、1998年から本格的に関わるようになりました。2000年から2002年ぐらいまで現地に住み、紛争の期間に村で何が起こっていたか、そのあとの人々の生活はどうだったのかを聞き取り、研究しました。今日はその村の話が中心ではないのですが、この紛争と、そのあとのプロセスが伝えるもの、というテーマでお話ししたいと思います。

クメール・ルージュ裁判という活動も簡単に紹介しておきます。【資料 5 】 これは 1 9 9 3 年に国連などが入ってカンボジアに新しい国家体制を整備したあとで、カンボジア政府と国際社会の話し合いのなかで何度も計画されては頓挫したのですが、最終的に 2 0 0 6 年から、クメール・ルージュ政権の当時本当にトップにいた数人の指導者だけを被告にする形で、国際法廷による裁判が行われています。



ポル・ポト時代のカンボジアについて一言で説明するのは難しいのですが、おそらく皆さんが考えるのは、どうしてそんなことが起こったのか、ということではないでしょうか。当時、ポル・ポト時代に入る前のカンボジアに700万人いたといわれる人口のうち、150万人ほどがポル・ポト時代に亡くなったといわれています。おおよそ5人に1人という死者の比率ですが、なぜそういうことが起こったのか。実は学問の世界では、分野ごとにいろんな意見があります。【資料6】

たとえば政治学ですと、シハヌークの内政が悪かったからだという意見があります。元々、 内戦の火花が上がった原因はシハヌークの政治にあったんだという考え方です。一方で、アメ リカが、紛争とは関係のない農村部の人たちに空爆したことで、人々の怒りに火がついて、そ の人たちは共産主義ではなかったけれど、反空爆という形でクメール・ルージュに参加してい

資料6

紛争/革命は、何だったのか?

- ・ 政治学の意見:
 - 内政の行き詰まり
 - アメリカの空爆
 - 共産主義という思想の特徴
- 国際関係論的な見方:
 - 国際秩序としての冷戦構造
 - 覇権主義
- ・ 文化論的な意見:
 - カンボジア人のパーソナリティや文化に悲劇 の源泉がある

ほかにも、共産主義の思想自体に、そういう傾向があったのではないかという意見もあります。さらに、国際関係論的な見方にもとづいて、すべては冷戦構造から始まったという考え方もできます。そして、もうひとつは、文化論的な立場から、カンボジア人のパーソナリティと文化に還元して、そこに問題の原因があったのではないか、という議論をする人もいます。

ただ、私自身が考えているのは、そういう各々の学問的立場から背景を整理することはもち ろん役に立つのですが、「いったいあれは何だったのか」という人々の問いに対する答を考え るうえでは、もう少し思想的というか、「ポル・ポトたちの目指していたものは何だったのか」 という点を考えることが必要だということです。

この点で、今スライドで紹介しているのは、リティ・パンという名前のカンヌ映画祭でドキュメンタリー部門の審査員をしたりするかなり著名なカンボジア人の映像作家の意見です。【資料7】この方はポル・ポト時代のカンボジアにずっとおられまして、終わったあとは生き残りとしてフランスに行かれました。彼は3年8ヵ月あまりのポル・ポト時代に両親と兄弟の多くを失ってしまい、「その経験は何だったのか」という問いを胸に、その後何回もスタイルの違う映画を作っては、問い続けています。彼が著書で伝えている意見は、あの時代に生じた「殺人は、宗教でも文化でもない。イデオロギー(思想)にもとづくものだ」というものです。

ここでイデオロギーというと、ごく限られた共産主義思想のことを指しているのかという話になりがちです。しかし、わたしが思うに、ここでパンが言っているのは、それとは少し違っています。彼の著書のなかには、スライドにあるポル・ポト時代のエンブレムがよくたとえ話に出てきます。すなわち、広い用水路があって農業が栄え、その中には工場があって工業も栄えている。ただし人はひとりもいない。人間不在のなかで、極端な発展を目指していたのがポル・

ポトだったという意見です。



こちらの資料ですが、左側に名前があがっているのはクメール・ルージュ政権の当時の指導者です。【資料8】彼らの多くが、首都の最上級の高校を卒業して、フランスに留学し、ある意味当時の近代的な、最先端の知識を学んで帰ってきた人物です。そして、それにもとづいて、いわば当時の世界で最先端の社会の改造・進歩を考え、その実現を目指すプランを実行したといわれています。ただし、そこには人はいなかった。求められたのは効率であって、人間関係や助け合いといった言葉はほとんど考慮されなかった、ということがわかります。

近代的知と社会工学				
名前	シソワット高校 卒業	フランス留学	教員経験	
Pol Pot	×	0	0	
Nuon Chea	×	×	×	
leng Sari	0	0	0	
Kheu Samphan	0	0	0	
Hu Nim	0	0	0	
Hu Yuon	0	0	0	
Duch	0	×	0	

資料8

カンボジア紛争の構成要素を私なりにまとめると、一番大きい要素が冷戦体制にあったことは間違いありません。【資料 9 】ただし 2 番目には効率主義があります。これは、先ほどお話しした部分です。右肩上がりの成長のために、人間性を考慮せずに、社会の改革を進めていく。そういうことを突き詰めるとポル・ポト時代のような状況が起こる、といえます。

資料9

「カンボジア紛争」の構成要素

- ① 冷戦体制 → 分断された国際秩序(覇権主義、大国の論理)
- ② 効率主義 → 反民主主義的手段(エリート) による社会の刷新、右肩上がりの成長という 発展モデル
- ③ 権力者が主役の社会像 → 王と農民の ギャップ
- ④ 閉じられた知識・情報系 → 自分の生活の「外側」を考えられない

そして3番目、4番目はどちらかというとカンボジアの内的な状況です。ひとつは権力者が主役の社会像です。権力者、つまり親分には子分は黙って従うという社会状況が、伝統的な王の時代からあったことは間違いありません。そして最後は、閉じられた知識・情報系と書きましたが、外側の世界で起こっていることを、誰も知りえなかった、という問題です。今のようにスマートフォンでいろんな情報が氾濫しているわけではありません。当時の東南アジアの農村は、地域ごとにかなり自律的な生活でした。さらに、ポル・ポト時代のカンボジアでは、人々の移動が制限されており、許可がなければ村を通りたいけれど入れないという状況があったと聞いています。人々は、ほかの場所で何が起こっているのか知ることができず、自分の生活が今後どうなるのかを考えるヒントも得られない状況でした。

最後のポイントに移りますが、カンボジアではそのあとポル・ポト時代が終わり、国連が入って1993年に新しい国家を作りました。それで紛争は終わったのかというと、冷戦構造という条件はある意味クリアしたように思いますが、3番目と4番目、それと2番目の効率主義についてもですが、まだいろんな形でカンボジア社会に影を残していると思います。【資料10】

資料10

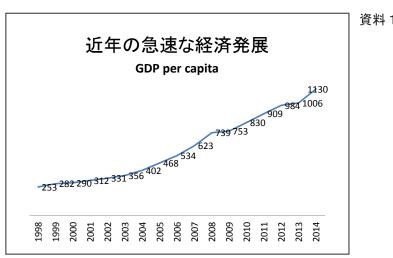
紛争は終わった?

- カンボジアの場合、戦闘を伴う一般的な意味での紛争は1998年で収束した
- ・しかし、社会の平等性の向上、個々の市民が 自由に能力を発揮できる環境作りといった上 記の③と④への処方箋は進んでいるか?
- 2015年10月27日、国会前での野党議員への "暴漢"による襲撃

← フン・セン首相の教唆?

たとえば、ほんの最近、フン・セン首相がフランスで外遊中の今年の10月27日に、「見 ていろ、明日何かが起こる」とインタビューで述べたところ、翌日に首都プノンペンの国会の 前で野党議員2名が暴漢に殴られて病院送りになるという事件が起きました。後にその実行犯 が逮捕された際、フン・セン首相は関わりを否定しました。しかし話がうまく出来過ぎています。 要するに、この事件は、「私に楯突いた者はどうなるか、よく見ておけ」という権力者として のメッセージをカンボジアの一般の人々に示したとしか思えません。

カンボジアは、現在の日本からは優秀な投資先として見られています。ひとり当たりの GDP がすごい勢いで上昇していて、開発の優等生といった感じです。【資料11】しかし、その裏 には強いメディア規制があり、そのせいもあって、先ほど言ったように権力者とそれを取り巻 く社会構造になんら変わりはありません。



資料11

ただし現在、カンボジアの国民は37%ぐらいがスマホを持っているようで、Facebook(フェ イスブック)などもあります。先ほどの国会前での暴漢による事件も、その数時間後には現場 の写真が Facebook で拡散しました。この意味で、権力者の横暴に歯止めをかけるツールにな りつつありますが、肝心なところでは、紛争の原因の一端となった「権力者とその取り巻き」 という社会の特徴は、カンボジアではまだ変わっていないと思います。

また、フン・セン首相は、暴力的な事件がまだ消えていないという社会の事情を利用しよう としています。【資料12】すなわち、首相はよく、内政が間違った方向に進めば「カンボジ アは内戦にすぐまた逆戻りするぞ」ということを言うんですね。たとえばクメール・ルージュ の裁判のやり方について、「国際社会の要求が100%通ると、カンボジアはまた内戦になるぞ」 といった言い方です。そして、選挙の機会にも言います。「選挙で野党が勝利したら、また内 戦になるぞ」と、そういうことをしきりに言います。カンボジアは紛争を経験して、まだ紛争 後の傷跡が大きく残った、回復が進んでいない脆弱な社会なんだということを、いろんな言い 方を使って強調するわけです。

しかし、地域研究者として、たとえば村の中に入ってみると、そうではないと私自身は強く 思います。村の社会の中では、お互いの関係の修復がはるか以前から進んでいます。フン・セン首相がいう社会の脆弱性はレトリックであり、日常の人々の生活の回復は別の形で力強く進んできたことは間違いないと思います。

資料12

「再び紛争に陥る!」

- ・ フン・セン首相が繰り返す政治スローガン
 - 「もしも裁判のやり方を間違えたら・・・」
 - 「もしも選挙で野党が勝利したら・・・」
- ・しかし、<u>市井の人々は1979年から自分たちの</u> <u>やり方で過去と向き合い、生活を築いてきた</u> <u>という事実</u>を忘れてはならない
 - フン・セン首相が強調するカンボジア社会の脆弱性は、レトリックでしかない

最後に、「地域研究者にできること」と書きましたが、紛争の処方箋として地域研究者ができることがあるとすれば、ひとつはその地域に関する記録を残すことです。そして、もうひとつは、その地域の足下から問いを立てて、それを考えることができる人材を育てることだと思います。【資料 1 3 】

資料13

地域研究者にできること

- ・ 地域に関する記録を残す
- 足下から「問いを立てる」ことのできる人材を 育てる
 - 例えば、今日のカンボジアの研究者が示す限界
 - 「外部の枠組み」にもとづく問題設定の偏重
 - ・政治問題への萎縮
 - ・足下の地域の理解にもとづきながら、その場所の「常識」の外に出て問題を考えることができる人の育成に寄与すること

たとえば、今のカンボジアはメディア規制がかなり強くかかっています。国立の大学の教員はすべて人民党というフン・セン首相の党の党員にならないと、それなりのポジションに就けないということもあります。そのため、研究者たちは、政治に関わることについてまったく発言しないという立場でいます。ただし、彼らは問題の所在を理解しているし、打開の必要性は感じていますので、外国人である私がいろんな形で関わることで、間接的にでも問題を論じる

機会をつくるなど、何か将来に向けて役に立つことができるのではないかと考えています。

そのほかには、ポル・ポト時代に関する話のなかで、効率主義の話をしましたが、この効率主義という問題はいろいろな形でみられます。たとえば、今のカンボジアの大学生と話をすると、みんな国際機関が作ったような、気候変動がどうとか、要するにグローバルスタンダードのフレームワークだけで自分の国の自然や社会の話をしようとします。足下ではなく結果ばかりに目が向かっている点で、これもある種の効率主義のようにみえます。そうではなく、その枠は脇に置いておいて、あなたの地域では何が問題で、それがどういう形で、歴史を経て、あなたの地域の何を変えようとしているのか。そういうことをきちんと理解して、そこから小さくてもいいから声を出して考えてみる。そういう試みを後押しすることでも貢献していけたらと思います。

最後になりますが、地域研究という学問については、やはりフィールドワークを強調する必要があるかと思います。フィールドワークは、現場の本質を考えるという地域研究の優位性を保つ方法ですし、現実社会で何が起こっているのか、人々はどのようにして生きているのかを実際に見て認識し、政策や科学技術へ常にフィードバックをかけることができます。人間社会の発展の駆動力、たとえば科学技術がそのひとつですが、それに頼った右肩あがりの開発を、フィールドワークに即して問い直すことが可能です。つまり、右肩あがりの成長を支える技術であっても、それがどういう形で社会の中で適応されるべきなのかといった問題です。そういうところでは、やはりフィールドワークをもとにひとつの現場の地域性をフィードバックすることが地域研究者に求められている役割だと思います。【資料14】そこではおそらく、人間的な共感やつながりが大切になると思います。

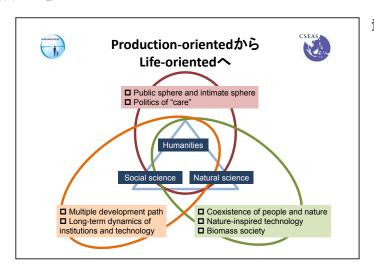
資料14

「現場の本質」とフィールドワーク

- 地域研究の優位性
- 現実社会で何が起こっているのか、人々はどのようにして生きているのかを実際に見て、認識し、政策や科学技術へ常にフィードバックをかけることは、人間社会の発展の駆動力(例、科学技術)を適切な方向へ導くために必須

地域研究者を自称する研究者には人文社会系の人が多いのですが、わたしの勤務先では、場合によっては工学系のエネルギーや防災の技術の研究者と一緒になって仕事をしています。そのときのキーワードのひとつは、生産の効率性ではなく、「生活」であったり「生存」であっ

たりします。つまり、「われわれの社会は、どこへ向かうべきですか」というディスカッションを、 地域の現実を中心に、ほかの分野も巻き込んでやっていくことが地域研究のひとつの役割だと 思っています。【資料 15】



資料15

どうもありがとうございました。

なお、小林さんには京都大学学術出版会から2011年に出版された、とても素晴らしい『カンボジア村落世界の再生』という本がありますので、興味のある方はそれも読んでください。

次は慶応義塾大学の佐川さんにお話をお願いします。佐川さんは『暴力と歓待の民族誌―東 アフリカ牧畜社会の戦争と平和』という著書を昭和堂から2011年に出版しています。こち らも興味のある方はお読みください。では佐川さん、よろしくお願いします。

○佐川

佐川です、よろしくお願いします。

世界的に高名な『エコノミスト』という雑誌は、2000年に、 内戦が多発し貧困にあえぐアフリカを「希望なき大陸」と表現して 衝撃を与えました。それが、2011年にはアフリカの形をした虹 色の凧が空に舞い上がる姿で、経済成長の道を歩む「勃興するアフ リカ」を表現しています。この10年で、アフリカのイメージは絶 望の大陸から希望の大陸へ、救済の対象から有望な投資先へ変わり つつあるようです。【資料16】



資料16

「希望なき大陸」から「成長する大陸」へ?





2000年5月

2011年12月

アフリカ研究者としては、アフリカがポジティブな言葉で語られるようになったのはうれしいのですが、同時にアフリカの現状を冷静にとらえる必要もあります。たしかに1990年代に発生したルワンダなどでの凄惨な内戦の多くは収束しましたが、今世紀には以前とは異なる形態をとった、主に3つに分類できる紛争が発生しています。【資料17】

資料17

21世紀のアフリカにおける紛争の特徴

- ・ 大規模な内戦は一段落: ルワンダ、シエラレオネ...
- 選挙関連の紛争の頻発:ケニア、コートジボワール...
- ・「対システム紛争」の広がり:ボコ・ハラム、AQIM...

参考: Straus, S. 2012. Wars Do End! Changing Patterns of Political Violence in Sub-Saharan Africa, *African Affairs* 443: 179-201.

ひとつは冷戦終結の前後から進んだ民主化、つまり複数政党で争われる選挙の前後に発生する紛争で、とくに2007~08年のケニアでの選挙後の暴動は記憶に新しいところです。もうひとつは、選挙などに参加せず暴力を用いて既存のシステムへの挑戦を試みているとされる、いわゆる「テロリスト」による暴力です。こういった紛争は、しばしば政治制度を悪用する貪欲なエリートや極端な宗教的信念の問題として分析されますが、それだけではなぜ少なからぬ一般の市民が過激な暴力に動員されていくのかという問題への答が、なかなか見えてきません。その点を考える際に重要なのが、みっつめのより目立たない紛争です。【資料18】この表は、政府が直接の当事者にはなっていないローカルで小規模な(コミュナルな)紛争の、1990年から2009年までの発生件数を示しています。2000年ごろから増加してそのあと、高止まりしていることがわかります。年間の発生件数はだいたい300件から400件ですが、

ここには記録されていない、おそらくこの数倍の小規模な紛争が起きているとされます。その 原因を特定するのは難しいのですが、あるデータベースによると、だいたい3分の2は自然資 源、とくに土地の利用やその権利をめぐる対立が主要な原因として挙げられています。

資料18

コミュナルな紛争の継続

- 国家が直接の当事者ではないローカルな紛争
- 対立の争点は土地など農村部の自然資源
- 農村部の対立と内戦や「テロ」を連続体として捉える



アフリカでは急激な都市化が進んでいますが、今でも5割以上の人口は農村部で、農業や牧畜に依存した暮らしをしており、土地へのアクセスは生活の根幹に関わる問題です。この生活に根付いた不満を放置することで、ローカルな紛争が発生・継続しますし、大規模な紛争に人々が動因されていく動機の一端を提供することになります。

ただし、アフリカで人口がどんどん増え、そこに気候変動の問題が加わり、利用可能な資源量が減っている、だから必然的に紛争が起きるんだ、というよくある説明には注意しなくてはいけません。資源が限られているからこそ、異なる集団が協力して事態にとり組むという話もたくさんあるわけです。問題は、特定の集団が国家や近隣集団から多くの権利を歴史的に奪われてきたという剥奪意識を抱いていること、そして今でも一部のエリートが資源の分配を政治的な道具として悪用していることが対立を深めている点です。もうひとつ重要な点は、厳しい環境下におかれた住民は、単に紛争に受動的に動員されていくわけではなくて、平和を維持したり生活を改善するための主体的な営みを続けている、ということです。地域研究の視点から平和の問題を考えるときには、政府や国際機関が法制度の整備などを進めるいわゆる「上からの平和」だけではなくて、住民がNGOなどと協力しながら営んでいる「下からの平和」、あるいは「草の根の平和実践」、こういうものを現場に分け入って明らかにしていく必要があると思います。【資料19】

資料19

地域研究の視点

- 地域の歴史性、資源配分の政治性、住民の主体性 のなかで紛争の原因と平和の可能性を考える
- 「上からの平和」だけでなく、「下からの平和」や「草の根の平和実践」に注目する
- ローカル・レベルでの資源配分をめぐる調整の現場 にわけいる

私が調査しているのは、さきほど石毛先生のお話にも出てきましたけれど、アフリカ東部のエチオピアやケニア、タンザニアなどで遊牧生活を営んでいる小さな民族集団です。【資料20】この地域は国際機関の文書では、人間の安全保障がもっとも強くおびやかされた地域として言及され、武力を用いた紛争が多発しています。多くの牧畜民は国境地域に住んでいますから、内戦が起きるとその余波で自動小銃が流入してきます。警察は紛争に対処できないだけではなく、むしろ警察官が紛争の中に加わってその戦果を自分のものにしているという報告もあります。この状況下でどういう草の根の平和実践がなされているのか。エチオピアとケニアの国境地域、そしてケニアとタンザニアの国境地域の事例を紹介したいと思います。

資料20

東アフリカ牧畜地域

- •「人間の安全保障が最も強く 脅かされた地域」
- 放牧地や水場、家畜をめぐる 衝突の頻発
- 農地や自然公園への土地剥奪、小火器の拡散、警察の機能不全



エチオピアとケニアの国境地域は、首都からもっとも離れたところに位置しています。【資料21】資料の地図に大きい字で書かれているのは民族名ですが、非常に小規模な民族が多数、この狭い地域に分布しています。私が調査しているのはダサネッチというおもにエチオピア側に住む民族です。その隣にはケニアに住むトゥルカナという民族がいますが、あるデータベー

スによると2000年前後には毎年数十人から百人におよぶ死者が出ていて、事態はかなり深 刻なわけです。

エチオピア・ケニアの国境地域 • 人口数千~数十万の多様な ティジ MF4 民族、長い衝突の歴史 والط 27 ハシラ L90 ダサネッチとトゥルカナ:1997 年28人、2000年142人、2005 年36人の死者...(UCDPより) トゥルカフ

資料21

写真にあるように、ここでは2000年代に入ってから、エチオピアとケニアのローカル NGOが、両国の地方政府を巻き込んで平和会合を開きました。【資料22】私もこの会議に何 度か参加してきましたが、とくに2006年の会合は大規模で、地域住民が数百人集まり、サ バンナで3日間徹底的に議論を続けました。すると驚いたことに、その会合が終わると、それ まで対立していたダサネッチとトゥルカナの牧畜民が互いの居住地を平和的に往来しあう、そ して同じ土地でともに放牧するという生活を始めたのです。



こういう会合は失敗例のほうが多いのですが、この介入がうまくいった理由はふたつありま す。【資料23】ひとつは地域住民が介入者を平和構築のパートナーとして信頼したことです。 多くの牧畜民は歴史的な経緯から、政府や外部者に非常に強い不信感を持っています。牧畜民 はかつて、紛争後に自分たちで平和儀礼を開いてきたのですが、そのときには家畜を屠殺して、焼いて、ともにその肉を食べる、ということをしてきました。ともに食べるという行為は平和のシンボルですね。しかしその際にはさまざまなルールがありました。そういう細かいルールも尊重しながら、NGOの人たちが平和会合でもこの共食の慣習をとりいれたのです。ここで重要なことは、「伝統がいつも優れている」ということではなくて、そのような小さな配慮を積み重ねたことで、牧畜民たちが「この介入者は自分たちの生活をしっかり見ているんだ」というある種の信頼感覚・意識を醸成していった。ここが重要なポイントです。

外部介入が成果を 挙げた背景

- 介入者への人格的信頼、伝統への配慮
- 国境の閉鎖ではなく資源の共同利用
- 民族の境界を越えた人間関係



資料23

もうひとつの点は、近代国家は集団間の紛争に対する対処として、よく行政区の分割、つまり各集団を異なる行政区に閉じ込めて別々に管理するという対策に終始しがちなのですが、この地域ではNGOと地方政府が折衝して、地域住民にむしろ国境を越えた放牧地の共同利用を促しました。牧畜民の元々の土地利用の実態に即して、この方針を明確に打ち出したのです。

この地域の牧畜民は、民族のレベルでは敵対していても個人のレベルでは双方の土地を訪問して、相手民族のメンバーと友人関係や結婚関係を築いています。私たちの感覚だと、「敵」の民族と友だちになったり結婚したりすることは非常に難しいことに思えますが、牧畜民にそのことを話すと、よく返ってくるのは「俺たちの胃袋はみんな違うんだ」という答です。胃袋というのは、彼らにとって個人個人の個性や感覚、思考が発する場です。自分は敵に親を殺された、だから自分は友だちにはなれないけれど、お前はそういう経験がないんだから別にお前が友だちになるのは自由だ、というように、この地域の牧畜民は各人の「胃袋の決定」を徹底的に尊重します。だから、多様な人間関係が民族の境界を越えて広がっているわけです。長引く紛争によりその人間関係が停滞していたけれど、NGOによる「国境を越えてきちんと一緒に放牧しましょう」という言葉に勇気づけられて、個人的関係を頼って、もう1回資源の共同利用が回復したということです。

ふたつめの事例はケニアとタンザニアの国境付近の自警団です。この地域は、写真にあるようにけっこう雨が降って牧畜だけでなく農業も盛んなところです。【資料24】ここにはクリアという民族が暮らしていますが、1998年の報告によると、クリア同士の内部対立があり、家畜略奪がひどく、窃盗団もいる。そのため農地にアクセスできず、農業生産量は下がり、街にも人が途絶える、そういう状況だと書かれていました。しかし2010年に私がここを訪ねると、街は賑わいを取り戻し、農業生産も回復して生活に潤いが出てきていました。どうして状況が改善したかというと、それはスングスングという名前の自警団の活動があったからです。【資料25】

ケニア・タンザニアの国境地域

資料24

- ・ 家畜略奪攻撃や窃盗団
- クリア:町から人通りが絶え、 農業生産も停滞(1998年ごろ)
- 2010年:町は賑わい農業生産も順調、選挙時も平穏





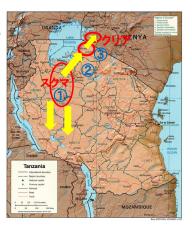
資料25

自警団「スングスング」の形成と伝播

①1980s初:スクマらで結成。移住 にともない南部に伝播

②1980s半:タンザニア政府により 承認、他の民族でも結成

③1998:ケニアのクリアによる導入。銃の回収、家畜泥棒の拘束、 盗品の捜索



面白いのは、この自警団が外部から移植された組織だということです。1978~79年に タンザニアとウガンダが戦争したとき、タンザニア北東部の治安が悪化しました。そこで、ス クマやニャキュウサというタンザニアの民族が「これは困った」ということで、自分たちで スングスングを結成しました。それがある程度効果を発揮したので、スクマがタンザニアの南部に移住していくときに、この自警団も同時に広がりました。1980年代の半ばにタンザニア政府がこの組織を承認したことで、ほかの民族でも自警団の結成が進みました。そして、1998年にケニアのクリアの行政官が治安の悪化に頭を悩ませて、国境を越えたタンザニアの北部に行き、スングスングの結成の仕方を学んだそうです。というのは、クリアは実は国境を越えたタンザニア側にも住んでいて、元々両者のあいだに密な交流があったからです。その話をもとに自警団が結成され、銃の回収や家畜泥棒の放逐がケニアのクリアでも可能になったということです。

自警団がうまく機能した最大の要因は、コミュニティと政府の双方から活動の正当性を認められたということでしょう。【資料26】スングスングは、長老の権威のもとに、若者が実働部隊として働くという組織です。これはこの地域の多くの民族集団の社会構造に合致した組織化のあり方で、住民には受け入れやすかったのです。ただし、治安維持は警察の権限で、別のアクターがそこに参入しようとすると普通は警察が強く反発しますが、この事例ではクリアの地方行政官が頑張って「地域の外部からきた警察官にはクリアの地理や人間関係のことがわからない、だから住民に一部の権限を委ねなさい」と説得したのです。これはアフリカの各地でみられる、国家と国家以外のアクターが協力・分業体制を築きながら、地域の社会秩序を維持していくハイブリッド・ガバナンスのひとつとして、位置づけることができます。

資料26

自警団が治安改善に寄与した背景

- ・ 各集団の社会構造に対応(長老-若者)
- 地方政府や警察との協力・分業体制(ハイブリッド・ガバナンス)
- 政府と地域社会の双方から正統性を獲得

ふたつの事例を簡単に見てきましたが、この地域で成果を上げている事例は、いずれも地域の伝統や慣習に一定の配慮を払っていること、そして民族や国家、今日は取りあげていませんが宗教など、そういう集団の境界を越えた人間関係のネットワーク、横断的な紐帯をうまく利用したり、活性化させていること、という共通性がみられます。【資料27】

横断的な紐帯(cross-cutting ties)の重要性

- 民族や宗教、国家の境界を越えた親密な人間 関係のひろがり
- 「閉鎖的な部族の集まり」ではなく、「移住と混 交の歴史から生じた連続体」(I.Kopytoff)
- 「近代的な」場における関係形成の継続、携帯 電話等をとおした関係の維持

後者について補足すると、たとえば民族というレベルではたしかに対立する局面が多い、だけどその民族という垣根を越えた個人的な紐帯が広がっている、あるいは、民族という属性とは別の属性を通して友好的な関係が広がっている。こういった関係は、現在では学校やNGOなどの活動の場で新たに作られていますし、携帯電話などの新しいメディアを通してその関係が維持されています。ひとつの例ですが、ダサネッチの青年の携帯番号の登録先を見ると、だいたい半分は同じ民族のダサネッチ、残りの半分は平和会合の場などで会ったいわゆる「敵」民族のメンバーです。これが携帯の中にちゃんと入っているんですね。こういう紐帯を通して人々は情報を集めて関係を改善するきっかけをつかむ、あるいは成功した制度をうまく取り入れるわけです。

そもそもアフリカは「閉鎖的な部族の集まり」というイメージが強くありますが、アフリカの歴史を紐解いてみると、人々は絶えず移動・混交して広範な人間関係を育み、新しい社会や民族をつくりだしてきました。そのことを指してコピトフという研究者は、アフリカは移動が常態の「フロンティア大陸である」と特徴づけています。たとえば東アフリカでは、多くの民族が今の居住地に居を構えるようになったのは、せいぜい一桁の世代前というところです。ですから、民族はちがっても社会の構造や文化的なルールに連続性があって、自警団のような制度がある集団で成功すると、ほかの集団が微修正を施しながら模倣していく、そういう横のつながりがあるわけです。

まとめます。【資料28】平和の定着のためには、人々の安定した生活を困難にしている問題を地道に解決して、いわゆる貪欲なエリートに動因されない人々を形成していくことが重要です。もちろん、こういう主張をする際には、私たち自身もしっかりとした状況認識に立って、「対テロ戦争」のような論理に安易に乗っかっていかないようにしなければならないという自戒を、同時に述べておく必要があります。

展望

- ローカル・レベルで「防げるものは防げる」。 「動員されない市民」
- 地域社会と外部世界をつなぐ仲介者(調整弁)の重要性の高まり
- ナショナル・レベルの経済成長とローカル・レベルの生活改善の両立

私たちはどうしても大規模な内戦や衝撃的なテロ行為ばかりを注目してしまいますが、その背後にはローカルなレベルで抑止された多くの葛藤や対立があります。「ではなぜ抑止できたのか」という理由を、それぞれの現場から探っていく。それがフィールドワークに依拠した地域研究が、紛争や平和の研究や実践に貢献できる領域のひとつだと私は考えています。もちろんローカルなレベルでできることには限界があり、今の世界の枠組みだとどうしてもそれが国レベルの政策とどこかで接合される必要があります。とくに、冒頭に述べた近年の国レベルでの経済指標の改善、これが地方の住民の生活の改善につながっているのかという問題は重要です。少なくとも私が調査しているエチオピアでは、21世紀に入ってランドグラブと呼ばれる動き、つまり大規模な商業プランテーションが外部資本によって次々と作られており、牧畜民が土地から退去を迫られ、不満を鬱積させています。経済成長の果実をどうやって周辺部の住民に届けていくのか、そのことが今後のアフリカにおける平和の定着を考える際に、注目すべきポイントだと考えています。

どうもありがとうございました。

それでは最後に、酒井啓子さんからお話しいただきたいと思います。

酒井さんは著書がたくさんありまして、とくに岩波新書では『イラク 戦争と占領』や『イラクとアメリカ』など、皆さんの中にもお読みになった方が多いのではないかと思います。マスコミにも積極的に参加されています。では、よろしくお願いします。

○酒井

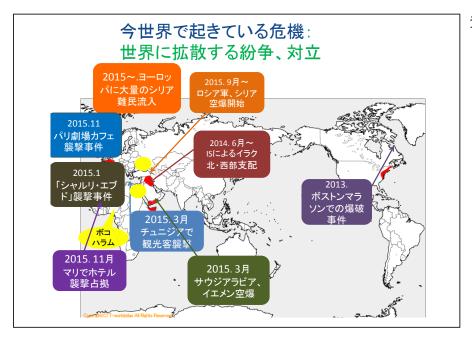
ただいまご紹介にあずかりました、千葉大学の酒井でございます。私は「中東地域研究が紛争解決に何ができるか」というテーマをいただきました。中東の場合、そのテーマで話すことはたくさんあって、15分ではなかなか話しきれません。前半の基調講演を拝聴して、紛争の



話よりも、もっと食べ物の話を私もしたかったなぁ、食文化のエピソードを用意しておけばよかったなぁと思っております。といいますのも、島田先生からご紹介いただいた『イラクとアメリカ』など政治系の本以外に、岩波新書で『イラクは食べる』という本を出しております。これは岩波新書としては英断といってもいいことなのですが、なんとイラク料理のレシピを載せてくれたのです。レシピの本なわけではないんですが、「作ってみたくて買いました」という読者が何人かいらっしゃいました。お集まりの皆さんには、イラク人が何を食べているか、日常生活を通じた政治をぜひ知っていただきたいので、司会の島田先生に何の著書を勧めるかと聞かれ

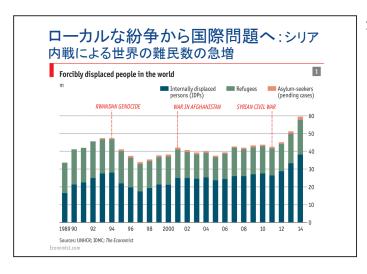
れば、実はこの本をご紹介いただきたかった、というのが正直なところでして・・・・。

前振りはこのぐらいにいたしまして、最近の中東情勢に目を向けたいと思います。先日のパリでの事件もありましたように、昨今のとりわけ2000年代に入ってから中東発と考えられる、あるいは中東となんらかの関わりがある形での国際紛争が多々増えています。【資料29】島田先生から冒頭で、ボコハラムによる人質誘拐事件などがすぐ国際テロだといわれてしまうというお話がありましたが、それもここに指摘してあります。国際テロというと安全保障の問題になってしまって、地域研究の視点が消えてしまうことがあると思うのですが、逆に中東の場合、すべての国際紛争が中東に根をもつかのように語られてしまうことが多く、地域の視点ばかりに責めを負わせるのも困ったものだと考えています。この中東からヨーロッパ、欧米へと暴力が拡散しているという視点で見られている、という現実をどう考えるか。



資料29

今申しあげましたように、暴力自体が国際的に拡散すると思われているのと同時に、暴力の 紛争の拡大に伴う人の具体的な移動も多数あります。この表は冷戦が終わって1989年以降、 国際的に難民がどのぐらい増減したかということですが、ご覧いただければ明らかなように、 2011年に「アラブの春」を契機としてシリア内戦が起こって以降急速に、史上まれにみる 難民の増加が見てとれます。【資料30】皆さんもご存知のとおり、シリアから、あるいはイ ラクからヨーロッパに何十、何百万という難民が押し寄せていて、それがヨーロッパ社会の大 きな問題となっています。国境を閉じるか閉じないか、文明の衝突になるかならないか、とい うことが多々いわれているわけです。



資料30

このように中東を基盤とする、もしくは中東になんらかの根っこをもつさまざまな紛争の種、紛争の結果として起きるさまざまな問題が国際社会を脅かしている、そういう枠組みで今、物事は語られているのではないかと思います。中東の地域研究を行いつつ、同時に国際政治を学んでいる私のような者にしてみれば、今起きているさまざまな紛争は、国際研究なのか地域研究なのかどっちなんだと、お互いに分野間で責任を押し付けあっている、あるいはお互いに、相手側がやっていることに対して文句をつけている状態のように見えます。【資料31】

資料31

中東の問題は国際政治か地域研究か

- 国際安全保障問題に落とし込むことの問題
 - 二項対立的・大括りの対立関係に矮小化
 - 中東情勢を自国独自の政策に利用「ホルムズ海 峡の機雷…」
- 地域の社会関係だけで全体を語ることの問題
 - 日常世界の宗派、民族間の緊張関係が「宗派紛争」「民族紛争」に転写
 - 本質主義的な問題へのアプローチ

まず、最初のスライドでお見せしたように、世界中でさまざまに起こっている紛争は、国際 安全保障の問題だ、テロに対する戦いだ、という枠組みで語られてしまいがちです。つまり二項対立で大括りの対立関係に矮小化されてしまっています。先ほど島田先生がおっしゃったように、たとえばボコハラムがどこからなぜ出てきたのか、どういう地域的なコンテクストがあるのか、ということには目がつぶられてしまい、これは国際安全保障の問題で、相手はテロリストなんだから何でもかんでもやっつけてしまえと、国際政治の枠組みで語るとそういう話で終わってしまいがちです。

もっとやっかいなのは、そういったものをまた自国の安全保障に利用しようとする人たちが出てくることです。誰とは申しあげませんが、自国の安全保障政策を変更するために「ホルムズ海峡で機雷がまかれるかもしれないので」と、30年前の論理を持ってくる。ちなみに80年代にはそういうことがありましたが、今はそのような可能性は全然ありません。つまり、実際のコンテクストとは遊離した形で、外交政策などに反映されてしまう問題があります。では地域のコンテクストを全面的に取りあげて、地域特有の問題を中心軸において問題を分析すればいいのかというと、必ずしもそうではありません。やっかいなことに、中東地域で日常的にある宗派の違いであるとか民族の違いであるとか、そういったものがすべて現在起こっている紛争の種にあるとも見られかねません。元々中東ではシーア派とスンニ派という宗派の仲が悪いとか、地域的な細かい紛争要因に原因を帰されてしまって、彼らの地域的な特質性が国際的な大きな問題の根源にあるんだという本質主義的なものの見方がなされてしまうという問題があります。

さらに中東の場合は、イスラームをどう考えるかという問題があります。【資料32】中東 紛争というと、昨今はとくにイスラームの問題だと見られがちです。先ほど申しあげたように、 国際政治か地域研究かとなったとき、「イスラームはどっちなんだ」という問題にもなります。 通常、安全保障の方々からすると、イスラームは特殊な何かよくわからない宗教、あるいは文 化を抱えた人たちのものであるという見方をされます。一方でイスラームはご存知のとおりグ ローバルな宗教であり、国際的なネットワークを持っています。あるいはイスラームと一言で 言っても、宗教を意味する場合もあるし、文化として表出される場合もあるし、「イスラーム国」 (以下、IS)などが抱えているようなある一定の政治思想であったりもします。いろんなイスラームを一言で語れるものではありません。そのような複雑性を前提に見ないといけない。たとえば今回のパリで起こった襲撃事件などに対しても、犯人が IS だと犯行声明が出されていますが、 それに対してさまざまな地域のイスラーム社会の人たちが、さまざまな文脈で「あれは私たちのイスラームではない」という発信を繰り返し行っています。またアフリカのどこかのイスラーム教徒が言っている「あれは私のイスラームではない」ということと、アフガニスタンのどこ かの村のイスラーム教徒の「あれは私のイスラームではない」と言っていること、その違い方もそれぞれ違っている。そういう多様性があるにもかかわらず、「イスラーム」の一言で抑えこまれてしまうという問題があります。ISの問題でも、その要素を見ていくとそれぞれに原因があって、イスラームで括ってしまう以前に、原因が多々あるわけです。

資料32

中東の問題は文化か政治か

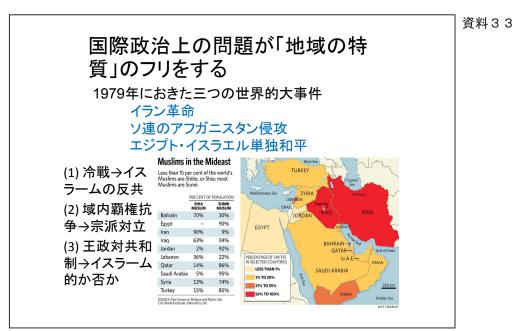
- 中東の紛争=イスラームで解釈できるか
 - イスラームに原因を求めることの問題
 - 「「イスラーム国IS」は「私たちのイスラームではない」」という現地の声
- •「イスラーム国IS」出現の原因
 - イラク戦争の失敗(ブレア元英首相「イラク戦争 があったからISが出現した」)
 - シリアでの反政府活動の失敗=「アラブの春」 の失敗
 - ヨーロッパ出身のIS:イスラームか西欧起源か

最近イギリスのブレア元首相が言ったように、イラク戦争がなければ IS などというものは出てこなかった。つまりイラク戦争でフセイン政権をひっくり返し、それに対して不平不満を持つ反米的な人々、あるいは前政権の中で生活していた人たちが、IS に流れていったという、イラク戦争が生んだ派生系としての IS という側面もあります。一方で、難民が増えた問題をとらえれば、その原因にはシリア内戦が2011年に起きたということがあるのですが、それによって国家が破綻状態に陥った中で IS が生まれてきました。こうみればイスラームとは関係ない、むしろ内戦という政治的な原因ですし、今回のパリの事件でいうと、ヨーロッパ国内でイスラーム系の移民が抱える問題があります。これは、元々はフランスが社会問題を抱えていたからこそ、その社会問題で疎外されていた人々が IS に合流したという要素があるわけです。

これらの問題を国際政治から取りあげるのか、地域研究から取りあげるのかということを考

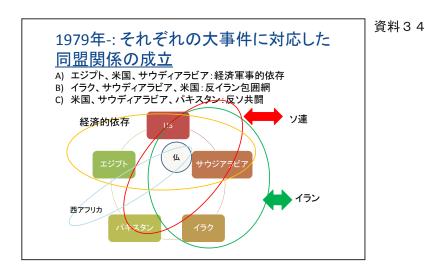


えたときに、私が考えるのは国際政治の問題がいろんな形で地域の特質のふりをする、地域の レトリックをかぶることによって、両者が妙な具合に相互補強しながら紛争が起こっていくと 考えると、わかりやすいのではないかと思います。【資料33】



きっかけとなったのは1979年だと私は思っております。何が起こったかといいますと、 イラン革命、ソ連のアフガニスタン侵攻、エジプトのイスラエル単独和平という3つの大きな 出来事です。この年に起こった3つの出来事は、すべて国際政治の一部として起こった事件で、 この事件への対応の仕方は基本的に国際政治の大きな枠組みの変化で起こっています。【資料

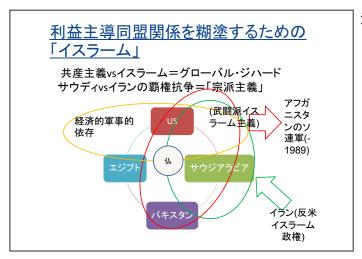
3 4]



今申しあげた三大事件のうち、エジプトの単独和平は時間の関係で、ここでは説明を省略します。次のイラン革命についてですが、これに対して世界は何を行ったかというと、まずイラン革命によってイランという親米の、アメリカの最大の同盟国が反米に変わってしまった事件

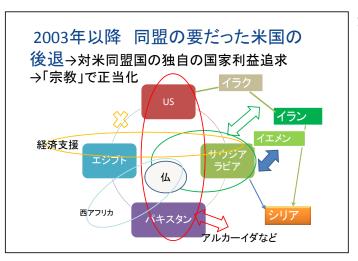
でした。これに対して、アメリカを中心にサウジアラビアや当時のイラクがタッグを組むような形をとってイランと対立する、という同盟関係が、国際政治上の必要性から生まれました。一方で、同じ年の終わりにはアフガニスタンにソ連が侵攻してきたという冷戦上の大事件が起きる。これに対しては、また別の形ですが、アメリカがやはり中心になって、今度はサウジアラビアとパキスタンを巻き込んだ同盟関係を確立し、アフガニスタンにいるソ連をどうやって撃退するかということを算段したわけです。繰り返しになりますが、あくまでも国際政治上、とくに冷戦期の米ソ対立関係の展開に対応するための、同盟関係だったわけです。ところが、アメリカは「冷戦」という目的を掲げるのでいいかもしれないんですが、エジプトにしてもサウジアラビアにしても、イラクにしてもパキスタンにしても、アメリカの同盟国は自身の同盟関係を自国民に説明する際に、「アメリカと一緒になって冷戦構造の中で頑張るための同盟です」と説明するわけにはいきません。そんなアメリカ依存型の政策は、反発を受けることになります。

では彼らはどう説明するかというと、「これはイスラームのための戦いである」と言うわけです。【資料35】典型的な例が、アフガニスタンに侵攻したソ連をどう撃退するかのために組まれた連合で、サウジアラビアとパキスタンが共闘して反共イスラーム戦士を「イスラームのため」といって育成していった。これこそまさに、グローバルジハードと呼ばれる今のアルカイダが出現する根っこになるわけです。本来アメリカと一緒になってソ連をやっつけるという戦いが、どこかで「イスラームのために」という話にすり替わっていく。また、サウジアラビアを中心とした連合がイランと戦うぞ、というと、これもまた「イスラームのために」となります。サウジアラビアが「イスラームのために」というとそれはすなわちスンニ派のために、ということになりますから、「シーア派はけしからんやつだ」ということになっていく。本当はイラン革命の湾岸地域への波及を恐れる話だったのに、宗派対立のように切り替わっていくわけです。



資料35

ところが問題は、イラク戦争のあった2003年、そして2011年の「アラブの春」によって、だんだんアメリカが中東地域からプレゼンスを落としていきます。【資料36】そうすると、サウジアラビアなりパキスタンなりエジプトなりイランなり、そのほかの国々が、アメリカ抜きでこれまで培ってきた対立構造を引き継いでいくことになります。引き継いでいったとき、本家本元のアメリカがいなくなるので、そのときは正統化のために使っていた「イスラームのために」「スンニ派のために」「シーア派のために」という宗教の枠だけが残ってしまうのです。このように、本来国際政治として始まった問題が、地域のロジックである宗派や宗教などといったものに落とし込まれてしまって、宗派対立とか宗教対立が先鋭化するのではないか。私はそう考えています。



資料36

最後のスライドを見ていただけますでしょうか。【資料37】地域研究というのは、国際政治の変動によって変わってくると考えていいでしょう。今申しあげたのは、たまたま宗派や宗教が強調される例ですが、これはひと昔前ならナショナリズムということになります。国際政治が変動する中、ナショナリズムが強調される場面があるかと思えば、宗教が浮き彫りになる場面が表れてくる。アラブがまとまる地域そのものの枠も、ナショナリズムだったりイスラーム主義だったり宗派だったりするわけですが、それを決めるのは国際政治の中で何が敵になる

資料37

日常世界の文化とグローバルな政治がつながる今

- •「イスラーム」=地域社会の特質 抜きで紛争を分析することの功罪
- •「形式上」動員した宗教や文化要因が定着し 一人歩きする問題
- 「地域研究」が特定の領域に限定されるのではなく、さまざまな大きさ、規模の「地域」がぶつかりあって国際政治が変化するものとして捉える

「中東」=西欧列強が作り上げた西欧にとって の地政学的空間 かで、それによって取りあげられる地域につく形容詞が変わってくるわけです。「シーア派三 日月地帯」とか、「不安定な扇」とか。

最後にもう一度、食べ物の話をしておきます。このように政治の表面に出てくるアイデンティティは、ときにイスラームであったりナショナリズムであったりします。しかしたとえばヨーロッパに難民として流れ込む人々の生活を見ると、彼らはイスラームを主軸にして生きているわけでも、アラブナショナリズムを信奉しているわけでもない。彼らがもっとも共感をえる同郷意識は、生きる源としている食べ物に表れます。自分たちのなつかしい食べ物、自分たちの食べ物をそのまま、どこに行っても食べ続けていくために生活をしています。私がエジプトにいるときに、よくヨーロッパ在住のイラク人亡命者の家を訪ねていたのですが、そこでは真っ先に台所に入りました。政治の話は真っ向から聞いても答えてはくれませんが、食べ物を食べていると口が滑らかになっていきます。そうすると、自分が幼少のころに水牛の乳からできた生クリームがいかに美味しかったか、それにナツメヤシの果実からとったシロップをかけて食べるのがいかに美味しかったかということを話してくれるのです。するとその食べ物から出身地がわかりますから、「この人は南部の湿地帯の出身で、どういう生活環境にあったのかな」ということがまざまざと思い浮かんできます。そういう意味では食べ物研究、食文化研究というのは本当に政治を理解するうえでも重要なのです。どうもありがとうございました。

酒井さんありがとうございました、

最後のお話を聞くと、次回のシンポジウムのテーマは食文化でなければいけないんじゃない かという気がいたしました。

私から先生方にご質問をしてお答えいただく予定でしたが、ここで私が先生方の発言を聞いていくつかの論点をまとめさせていただきますので、それに対する批判なり感想なりを、聞かせていただこうかと思います。



ひとり15分でこのテーマは少し重かったです ね。とても難しいことがよくわかりました。ただ、 聞いていてわかるのは、たとえば最後の酒井さん が言われたように、国際同盟関係が変化するにし たがって、対象にする地域のネーミングがその論 理にしたがってどんどん変わります。そして紛争 の解決を導こうとするときに、国際的な覇権主義 とか同盟関係といったことが強調され、さらにテ 口対策といった話が急に表面化してきて、それが より国際的に共通点があるような印象を我々に与えるものが出てくる、そんな状況になっています。

佐川さんの最初のスライドから振り返ります。本当に私たちの認識にはいい加減なところがあります。10年前まで「絶望の大陸」と呼ばれたアフリカは、今は拍手喝采で「希望の大陸」と呼ばれ、経団連も経済関係者の人たちもどっとアフリカ大使館に行くようになってきています。10年前までは東京のアフリカ大使館のパーティに招かれても、出席者はたいへん少なかったのを覚えています。ところが、最近はとりわけ資源がたくさんある国のパーティは、都心のホテルで行われ、たくさんの人々が集まります。このような行動にみられる変化は、経済発展といった考えが中心になって起きています。最近では G8 とか G20 といった会議の主要課題も経済が中心です。そのことに対してみんな不満を抱いたり、不思議だとか思わなくなりました。首相も大統領も元首も、みんな「そろばん」を持って、お金の計算をして、経済状況を改善させて国民からの評判を得よう、という観点から話をするのが普通になっています。経済発展の果実といったものが、ある人たちには非常に多く届いているけれど、その果実にありつけない人たちの不満が膨らみ、それがたびたび起こる紛争の原因になっているということもいわれました。

そしてもうひとつは、酒井さんと小林さんがおっしゃっていましたが、地域研究はそういう ものに対して、昔からどちらかというとアンチでした。経済発展を標榜する機関からはお呼び もかからないし、こちらから手を挙げて発言することもしてきませんでした。

ある地域を見て、その地域や歴史のことがよくわかると、そこにおける地域問題は解決できるのか。その疑問に対しては、佐川さんの話が非常に印象的でした。外部の介入がある場合、介入する人は地域に対してある種の敬意を持つ姿勢が必要だと思います。それがあって初めて、メディエイター、仲介者としての役割を果たすことができ、物事が解決に動くという話がありました。地域の人たちだけで紛争問題が解決するかといわれると、どうもそうではなさそうです。それは小林さんも著書に書かれていますが、ポル・ポト時代の後は住民の間で問題解決しましょう、過去のことはすべて水に流してゼロから話しましょう、といっても解決しません。そういうことではなくて、やはりなんらかの枠組みがないと解決しないということはよくわかってきました。

その点で佐川さんに聞いてみたいのが、自警団のことです。紛争を起こしたところでは自警 団が結構たくさん作られ、これが非常にいい役割をすることもあるし、逆に自警団が武器を持っ て次の紛争の種になってしまうこともあります。地域で紛争を解決するときに自警団といった ものが、他地域との関係でどういう役割をするかということについても少しお話しいただきた いと思います。

以上が、私が皆さんの非常に多様な意見をまとめながら気がついた3点です。どれに関する ことでもいいので、5分ぐらいずつお話しください。

○小林

先ほどの「ポル・ポト時代の後のゼロからではない問題解決方法」という部分についてお答えします。ポル・ポト時代の後、冷戦構造でカンボジアが壁の向こうに置かれていて、内部の情報がなかった中で、ポル・ポト時代を経験してカンボジアの社会はゼロに帰したんだという意見がありました。たとえば、フランス人の神父のフランシス・ポンショーが書いた『カンボジア・ゼロ年』という本があります。そこでは、「戦争なりポル・ポトの支配なりで、人間関係も破壊され、生産基盤も破壊されゼロになった」ということが書かれています。本は非常に多く読まれたこともあり、また、ポル・ポト時代の社会改造の強烈なイメージがあり、そのような考え方が主流になりました。

ところが実際にカンボジアに行って、ポル・ポト時代を経験した人の生活の歴史をインタビューすると、話は1920年代のころまで遡ってフランスの植民地時代のことから始まります。人々の記憶は決して、ポル・ポト時代で切れているわけではない。彼らが生きている人生は、その前から始まっていますし、それから現在までの連続の中にあるわけです。社会全体を見ても、たとえばスライドでクメール・ルージュ裁判の写真を出しましたが、法制度上は、だれが責任をとるのかという手続きを行うことに意味があると思います。ただ、裁判で交わされる善と悪、いったい何が悪なのかというような話に意味があるかは、また別の話です。そしてさらに、カンボジアの人の日常生活は、そういう形で過去に向かいあっているのではありません。事実として、ポル・ポト時代に加害者といわれる人も、被害者といわれる人も、今一緒の村に住んでいます。彼らは、裁判が始まる20年以上前から、そこに一緒に住んで、日常生活をともにしてきたわけです。人々は、個人的には、ポル・ポト時代に何をされたのかという記憶は忘れないと強く思っています。だけど、社会的には、今の村の中での振る舞いには、そのような過去に関する感情を出さないという矜持が強く見られます。

このような部分を踏まえると、「裁判を通してカンボジアは過去を清算した、前に進めるんだ」という議論は必ずしもあてはまらない。普通の、一般人としての自分の人生のなかでの過去の悲惨な出来事との向き合い方という部分をとらえて、そこをフィールドワークして、理解を打ち出す作業がひとつ重要なことだと思います。

もうひとつ言うと、この裁判もそうですが、他にも、たとえば UNTAC (国連カンボジア暫定

統治機構)が出てきて紛争を解決したということも、実は外部からの介入なんですね。UNTAC がカンボジアの政府の機構を作りました。そのため、今のカンボジアでは、省庁があって、大臣がいて、その下に何々という組織があるという近代的な行政機構ができあがっています。この全体の機構の素案は、UNTAC のもとで、国際社会とカンボジアの勢力が協力してつくりました。しかし、今みてみると、外見は近代的でも、その中身は純然たるといいますか、要するに権威主義者とそれに従う取り巻き、という文化が根強く残った形で動いています。ですから外部的な仲介者や国連が介入して「はい、装置は作りました」「はい、良かったですね」「もちろん暴力は減りました、これで OK」でおしまいだとしても、社会を長い目で見た場合、それだけでは粗いひずみが残ったままだったということになります。このような部分についても、広く発言していくことが重要だと思います。

○佐川

自警団についてやはりポジティブな面とネガティブな面、どちらもあります。私が話したケニアとタンザニアの国境付近の事例でも最初はうまくいったけれど、ある程度治安が回復してくると、今度は自警団のメンバーがある人の家に行って、窃盗の疑いがないのに、「お前は家畜を盗んだだろう、牛を返せ」と脅迫する。秩序を回復するために結成された自警団が、汚職の源になってしまったのです。治安を改善させたことで取り締まる対象がなくなってきた、すると今まで自警団の活動によりもらえていたお礼がもらえなくなり汚職に走った、という経緯です。その結果として、自警団は住民からの信頼を失い消えていきました。そして、また治安が悪くなると似たような組織がパッと出てきて、良くなるとまたパッと消えていく。これは、外部の視点からはたいへん場当たり的でいい加減な対応に映り、「治安を維持し続けるためのもっと永続的な制度や組織はないのか」と私たちは考えてしまいがちですが、こういうアドホックな対応を繰り返すことで、住民の間に秩序維持に関する多くの経験知が蓄積され、紛争への対処能力がゆっくりとではあれ高まっていっている面を、私は強調したいと考えています。

仲介者の役割という点では、地域研究者が、国連や政府、NGOなどの外部介入者は地域の伝統や状況をきちんとわかってない、と批判することは簡単なのですが、多様な意見を集約してすべてのアクターにある程度の満足のいく結果を出す仲介は、すごくたいへんですよね。その際には、どこかの局面で事態をある種シンプルに捉える必要があると思います。地域研究者はどうしてもその地域の固有性や複雑性を強調する傾向が強いので、実際にどう問題を解決するのか、と問われたときにフリーズしてしまうこともあります。もし地域研究者がより実践的な形で紛争解決に関与していく際には、事態がとにかく込み入っていることを重視する地域研究者としての立場と、どこかでシンプル化をしなければならない仲介者の立場の乖離を、どう埋めていくかということがひとつのポイントになるかと思います。

○酒井

外部介入ということでいうと、さきほど佐川さんがおっしゃったような文脈とはまた別で、 逆に中東の場合は紛争が起きたときに外部に依存する、外部を逆に巻き込むことによって、自 分の力を大きく見せ、権力を奪うという発想が定着してしまった。それが9.11以降の変化 なのかなと思います。つまり、イラク戦争はたしかにアメリカが始めた戦争ではあるわけです が、その背景にはイラクのフセイン政権を倒すためにアメリカを利用してやろうという、厳し い言い方ですが、そういう亡命者たちがいたことは事実です。

さらにいうと、今のシリア内戦でも、アサド政権に反対するその反政府勢力が、当初「アラブの春」のような自然発生的な民主暴動で始まったものが、ここまで複雑化したのには、いろんな形で外部の支援を呼び込んで行った、という状況があるわけです。

そういう中で、ニュートラルな外部介入の方法などというものがありうるのか。単純に「ない」ということなのか、地域社会を理解した介入ならいいのか、地域社会でもそのどの部分をわかっていればいいのか。そうやって外部勢力を呼び込んで国内の権力争いに勝とう、と考える人たちは、たいてい、自国の状況をよく知った人たちですし、介入しようと考える側はむしろ介入される側のことを熟知していると考えている人たちだ、という怖さもあります。だから、逆にまったく知らない組織が入ってきたときのほうが、バランスがとれていると見えることもないわけではないという、非常に皮肉な結果も起こっています。

そして、外部介入の無力さについては、何がモデルとなりうるのか、その模範解答がないということがあるのですね。長期でみてどの例が成功例でどの例が失敗例か判別できないし、そもそも人間や社会を実験場にしてはいけない。その意味で、残念ながら今、国際政治学、国際



関係論がその地域における紛争にまったくなすすべがない、ということだと思います。

かといって、今のシリアの状況にしてもまったく国際的なアプローチから関わらなくていいのかというと、そういうわけではありません。難民対策にしても地域の外の人たちが関わってこざるを得ないことがあるので、そこは先ほど申しあげたように、国際政治と地域研究が密接に連帯しながら発展していけるのだということを自覚したうえで、対応する必要がある。つまり「これはあそこの地域の問題で、私の住む世界の問題ではないんだ」と切り離してしまうと、これは単なる外部介入になってしまいますが「外部の問題ではなくこれはわれわれの問題なのだから、全体として何とかしなくては」という視点の切り替えができれば、それが一番いいアプローチなんだろうと思います。

ただ残念ながら冒頭で申しあげたように、そのようにはなかなかならなくて、今はむしろ国際政治のアクターすべてが内向きになってしまっている状況です。とくに日本は、下手をすると日本以外はすべて外部ファクターだと考えていて、すべての外部ファクターを日本国内の政治に利用しようとしているような節もないわけではないと思ったりします。そのような各国の内向きの姿勢が、何か今の国際社会のやっかいさの原因にもあるのかな、と思います。あいまいな答えですが。

ありがとうございました。

今日のシンポジウムでは、地域研究を混迷の時代にどう活かすかということで、先生方にお話をしていただきました。 15分でまとめていただいたのですが、今日の発表の中で幾つか教訓は出てきたかなという感じがします。

ひとつは地域研究が持っているある種の豊かさと同時に、それが持っている限界といいますか、地域研究ではわからない状況がすでにいま起きているということです。

一方で、国際関係学などで俯瞰的で非常に明快な理論がぽんと出てくることが好まれていて、 たとえばテレビの解説でも3分でスッキリわかるような解説が好まれるようですが、そのよう なことの危なっかしさもわかってきました。

ただし地域研究の成果が単独で、未来を見るために活かせるかというと、それはどうもなさ そうだということも示されたと思います。地域研究の豊穣な成果と、国際関係論や安全保障論 などを繋いだり比較したりする議論の中で我々は紛争について考えなければいけない状況に なっていると感じます。

もうひとつは、それにもかかわらず地域研究がとても大事だと思うのは、酒井さんが言われ

たように、その地域が持っている特性に対して敬意を払わないと、紛争問題は絶対に解決しないということです。ですから現在グローバル化がどんどん進んでいますけれど、そのときに地域に敬意を払う、あるいは持っている文化を尊敬しつつ、どういう具合にグローバル化を図るかを考えることが大事です。そのときに、それを進める速度、テンポが大切です。私たちは速度をあまり気にしたことがないのですが、たとえば TPP でも、会合を始めると何月ぐらいまでには解決しないといけないとか、アメリカの国内問題もあるし、日本の政治状況も勘案してといった状況セッティングの中で優秀な官僚が知恵を絞って、何かにせかされて取りまとめにまい進している感じがします。だけど本来は、各地域がグローバル化を前提とするとしても、どのぐらいのスピードでやるのかということを常に考える余裕を持たなければならないと思います。

これは酒井さんが感じておられることと思いますが、私もマスコミ関係の方から「一言で言ってそれはどうですか」と聞かれます。「はっきり言って、わかりやすく言ってどうですか」と。 このような質問に簡単に答えるのは非常に危ないことです。

私たち自身もわかりたい。パリで起きたこともわからないことがたくさんあります。これを「一言で言ったらどうですか」「先生のご専門からいって、はっきり言ってどうですか」とよく聞かれます。それで僕は「研究すればするほど、説明することが難しいことがわかります。それがわかることに近づくということではないでしょうか」とよく言います。私たち自身もそうですが、単純明快、2行か3行でいえるような結論を求めすぎているのではないでしょうか。地域研究に長く携わっておられる本日の先生方の、先ほどご紹介した著書を読んでいただくとたいへんよくわかると思いますが、そんなに「簡単にわからないんだ」ということに我々はもっと自覚的になることが必要ではないでしょうか。そして我々は改めて地域の特性に敬意を払う気持ちが必要だと思います。それが今日の私の最後のまとめということで、締めたいと思います。3人の先生方にはどうも貴重な経験をお話しいただき、ありがとうございました。拍手でお送りください。



2016年2月25日発行

公益財団法人 大同生命国際文化基金 〒 550-0002 大阪市西区江戸堀 1 − 2 − 1 ☎ 06-6447-6357

http://www.daido-life-fd.or.jp/ E-mail dlf@daido-life-fd.or.jp